

ねん がつ にち
2020年3月15日

しじゆんせつだいさんしゆじつ せいてきぎやくたいひがいしゃ いの つぐな ひ
四旬節第三主日「性的虐待被害者のための祈りと償いの日」
きくち いさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

あた みず ひと うち いずみ えいえん いのち いた みず
「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が
で
わき出る」

さき ろうどく ふくいん じっさい かわ みず はな
先ほど朗読された福音では、実際に、のどの渇きをいやす水について話
すサマリアの女に対して、イエスは、自らの存在がもたらす永遠のい
のちについて語っています

みずか みず かた しゆ したが きょうかい
自らをいのちの水として語られる主イエスに従う教会は、つねに「い
のちの福音」を語り続けています。人間のいのちは、神から与えられた
たまものゆえ、はじめから終わりまで、例外なく尊厳をまもら
れ尊重されなくてはならない。教会はそのように主張し続けていま
す。

きょうこう にせい にんげん にんげんじしん じゆういし
教皇ヨハネ・パウロ二世は、人間のいのちを人間自身が自由意思の
おもむ かって げんだいしゃかい おも あ
赴くままに勝手にコントロールできるのだという現代社会の思い上が
りを戒めながら、そういった現実を「死の文化」とよばれました。そして
きょうかい まんえん し ぶんか たいこう まも
教会こそは、蔓延する死の文化に対抗して、すべてのいのちを守るた
め、「いのちの文化」を実現しなければならない。

かいちよく ふくいん ぼうとう しる
回勅「いのちの福音」の冒頭に、こう記されています。
ふくいん ちゅうかく いち きょうかい
「いのちの福音は、イエスのメッセージの中核に位置します。教会は、
ふくいん にち ところ こ う と じだい ぶんか
いのちの福音を日ごと心を込めて受け止め、あらゆる時代、あらゆる文化
ひとびと よ し ちゅうじつ つた
の人々への『良い知らせ』として、あくまでも忠実にのべ伝えなければ
なりません」

さらに 教 皇ヨハネ・パウロ二世は、この回 勅 において「殺してはなら
ない」と言う神のおきてを取り上げ、こう述べています。

「『殺してはならない』というおきては、人間のいのちを 尊 び、愛し、守
り育てるといった、いつそう能 動的な観 点においても、一人ひとりに拘
束 力を持っています。そのおきては、創 造主である神が人類との 間
に結んだ最初の契 約を告げる響きとして、すべての人の道 徳的良 心
にもう一度響き渡ります (77)」

キリストに 従 うわたしたちの心 には、「人間のいのちを 尊 び、愛し、守
り育て」よという神の声が響き渡ります。

残 念なことにはわたしたちが生きている社 会にあつては、神からの賜 物で
あるいのちが危 機に直 面し続けています。いったいわたしたちは、人間
のいのちをどのような価 値観に基づいて判 断しているのかを、大きな疑問
を抱かせるような事件も相 次ぎました。

障 害と共に生きておられる方々を、社 会に貢 献しなければいのちが
存 続する意味はないとして、暴 力的にいのちを奪 う事件もありました。

この数 年、せつかく与えられたいのちを生きている 幼 子が、愛 情の
源 であるべき親や保 護者の手で 虐 待され、命を暴 力的に奪われ
てしまう事件もしばしば耳にします。様 々な事 由から、誕 生すること
のなかつたいのちも少 なくありませんし、様 々な要 因に絡め取られる中
で自死へと追 いかめられる人も、多 くおられます。

また社 会全 体の高 齢化が進む中で、孤 独のうちに人 生を終える方々
の存 在もしばしば耳にいたします。誰 にも助けてもらえない。誰 からも

かんしん も かりつ きき お つ
関心を持ってもらえない。孤立のうちに、いのちの危機へと追い詰められて
ひと すく
いく人たちも少なくありません。

こようかんきょう きび なか ふあんてい せいかつ おく わかもの ふ
さらには、雇用環境の厳しさの中で、不安定な生活を送る若者も増
えています。加えて、かいがい らいにち ふあんてい ろうどうかんきょう なか
こんなん ちよくめん ひと であ ふ
困難に直面している人たちにも、出会うことが増えてきました。

きき げんじょう きょうこう にせい してぎ
危機にさらされるいのちの現状、教皇ヨハネ・パウロ二世が指摘する
し ぶんか しはい げんじつ なか きょうかい ふくいん
「死の文化」が支配する現実の中で、教会こそは、「いのちの福音」
たか かか で みず おお ひと とど どりよく
を高く掲げ、わき出るいのちの水を多くの人に届ける努力をしていな
ければなりません。

きょうかい せいしよくしゃ かみ たまもの そんげん まも
その教会にあって聖職者には、神の賜物である尊厳あるいのちを守
るために最善を尽くす義務があります。牧者として自らが神の民の先
さいぜん つ ぎむ ぼくしゃ みずか かみ たみ せん
とう た ふくいん ことば おこな も あか ぎむ
頭に立ち、「いのちの福音」をその言葉と行いを持って証しする義務が
あります。

ざんねん もはん せいしよくしゃ せいぎやくたい たしや
残念ながら、その模範たるべき聖職者が、とりわけ性虐待という他者
じんかく はずかし にんげん そんげん じゅうりん こうい そんげん
の人格を辱め人間の尊厳を蹂躪する行為におよび、いのちの尊厳
じれい かこ たすうほうこく
をおとしめる事例が、過去にさかのぼって多数報告されています。

にんげん とうと あい まも そだ かみ こえ みみ
それは、「人間のいのちを尊び、愛し、守り育て」という神の声に耳
と こうどう かみ みずか あい にんげん みず
を閉ざしてしまう行動です。神が、自ら愛される人間を、いのちの水
ゆた で いずみ みちび か は そら いど
が豊かにわき出る泉へと導こうとしているときに、枯れ果てた空の井戸
みちび こうどう せいぎやくたい ひがい う ほう じんかく
へと導こうとする行動です。性虐待は、被害を受けられた方の人格
ひてい そんげん あた かみ ちょうせん
の否定であり、尊厳あるいのちを与えてくださった神への挑戦です。

おとな ほご ひつよう みせいねんしゃ たい せいぎやくたい
さらには大人による保護を必要とする未成年者に対する性虐待や、

ぼうりよくこうい おこな せいしよくしゃ そんざい あき
暴力行為を行った聖職者の存在も明らかになっています。

くわ しきょう きょうく しゅうどうかい せきにんしゃ せいしよくしゃ
加えて司教をはじめとした教区や修道会の責任者が、聖職者の
かがいこうい いんぺい ひがい かしょうひょうか じれい せいかいかくち
加害行為を隠蔽したり、その被害を過小評価した事例も、世界各地
たすうしてき
で多数指摘されています。

にほん きょうかい れいがい せいしよくしゃ せいてき ぎやくたい ぼうりよくこう
日本の教会も例外ではなく、聖職者から性的な虐待や暴力行
い う じれい ひがいしゃ みせいねん ばあい ふか
為を受けた事例があります。とりわけ被害者が未成年であった場合、深
くる おお かつとう なんじゅうねん た じ
い苦しみと大きな葛藤のなかで、何十年も経ってから始めて、その事
じつ おおやけ かた
実を公にできたという方もおられます。

ふか くる おお かつとう ながねん し せいしよく
そのような深い苦しみと大きな葛藤を長年にわたって強いてきた聖職
しゃ かがい ひがい う みなさま しん わ
者の加害について、被害を受けられた皆様に、心からお詫びいたします。

きょうかい せかい か いど みず わ だ
教会がこの世界にあって、枯れた井戸ではなく、いのちの水を湧き出さ
いずみ よ そしき きょうかい かた しんし ほん
せる泉になるように、この世の組織としての教会のあり方を真摯に反
せい かみ くに じつげん し きょうどうたい そだ
省し、神の国の実現のために資する共同体へと育てていかなければな
おも
らない。いまはそういう「とき」であると思います。

ぎやくたい ひがい あ おお ほう ところ いだ ぎず ふか
そして、虐待の被害に遭われた多くの方が心に抱いている傷の深さ
おも は ねが ところ ぎず
に思いを馳せ、ゆるしを願いながら、その心の傷にいやしがもたらされ
きょうかい かぎ どりよく つ かさ けついで あら
るように、教会はできる限りの努力を積み重ねる決意を新たにしたい
おも
と思います。

きょうかい ふくいん かた かみ あい かた
教会は、いのちの福音を語り、神のいつくしみと愛を語り、すべての
まも かた つづ にんげん
いのちを守ることを語り続けています。そうであるからこそ、「人間のい
とうと あい まも そだ かみ こえ ところ と
のちを尊び、愛し、守り育て」という神の声に心を閉じることなく、
そんげん ひとり じんかく そんげん まも みち せんとう た
いのちの尊厳を、一人ひとり的人格の尊厳を守りぬく道を、先頭に立

あゆ つづ そんなざい おも
つて歩み続ける存在でありたいと思います。